



日米合同演習に示された 共同軍事態勢を許すな

「ソ連脅威論」をテコとした
有事体制構築策動を粉碎せよ

(一)

八月十八日から行なわれた、米第七艦隊と第三海兵両用戦部隊の「フォートレス・ゲール」(トリデのあらし)——正式には「MAFLEX79」(七九年度海兵両用戦部隊上陸演習)と呼ばれる合同演習は、参加総兵力四万人、艦艇二十六隻、航空機三百八十機という、「ベトナム戦後、太平洋における最大」規模のものであった。

まず、「敵軍に占領された沖縄をすばやく奪還する」ことを想定した演習の経過を見てみよう。

八月十八日、空母「キティホーク」、新鋭の強襲揚陸艦「タラワ」、ヘリ空母「トリポリ」などを中心とする上陸部隊は、フィリピンのスピック湾を出発し、沖縄周辺の海空域で、P3C、シコルスキーエ2Cなどの対潜しょう戒機による対潜作戦、対空訓練、艦砲射撃などを行った。

台風一一号のため上陸日程は一日くり下げられたが、八月二十四日には沖縄北部東岸に上陸の形勢を示す陽動作戦を行い、敵を海岸に引きつけて、そのすきにヘリコプター二十機で偵察の特殊部隊が北部山岳地帯に潜入。同時に沖縄本島東岸、ホワイトビーチ沖の浮原島には一五五ミリ砲六門と歩兵一個中隊がヘリで運ばれ、ホワイトビーチ上陸の援護射撃の配置についた。

「Dデー」(上陸日)の二十五日は、ヘリボーン(航空進攻)作戦で開始された。普天間飛行場には、「キ

ティーホーク」から発進した垂直離着陸攻撃機AV8

「トリポリ」などの艦上攻撃ヘリAH-1Jの機銃掃射などに援護されて、「タラワ」から一個大隊(七百人)が大型輸送ヘリCH-53、CH-46で着陸した。又、ホワイトビーチにも、一個大隊がLVTP7(水陸両用装甲車)、LCU(上陸用舟艇)で上陸した。

同じく二六日には、ブルービーチに一個大隊が上陸し、更にM60A戦車、物資を積んだトラックなどが揚陸され、又、北部の安波付近にもヘリで一個中隊が運ばれた。

その後は、キャンプ・ハンセン、キャンプ・シユワープ、北部訓練場などで、小銃、追撃砲、りゅう弾砲の実弾射撃、掃射作戦を行い、又、沖縄本島西方の伊江島では航空機の対地射爆訓練も行なわれた。

かくして、空前の大演習は、三一日にその幕を閉じたのである。

この大演習において確認しなければならないことの第一は、米海軍作戦本部長ハイワードが「太平洋で海上交通路を守ろうとすれば巨大な兵力がいる。米海軍は防御より攻撃にててソ連海軍を防勢に追いこむことを基本としている」と語るよう、米帝(軍)のきわだった攻撃的姿勢である。

大量の兵力を一挙に戦場に送りこみ、一気に決着をつけるという米帝(軍)の戦略は、米帝のベトナム戦争への本格的参加が沖縄の第三海兵師団のダナン上陸であったように、沖縄が、侵略と革命の烽火鎮圧の前進基地であることを、あらためて明らかにしたのである。

第二に確認すべきことは、この大演習が、日帝の積

マルクス・レーニン主義通信

月刊 1部100円

共産主義者同盟(全国委)
マルクス・レーニン主義派
編集発行人 日黒安雄
横浜港南郵便局私書箱16号

振替 横浜3719

本号の内容

第五九回総評大会

大平所信表明演説

経済白書

YH貿易労働者の闘い

—第二次ブント総括—

どのようにして「第三期」を清算すべきか

// 5頁
// 4頁

// 3頁
// 3頁

// 2頁
// 2頁

マルクス・レーニン主義通信

極的承認の下で展開されたということであり、実際上の日米合同演習に他ならなかつたといふことである。

「三四年前の沖縄戦と同じだ」と叫んだ沖縄人民の心をふみにじつて遂行された「フォートレス・ゲール」は、沖縄が「基地の島」であることを白日の下にさらした。しかも、この演習に自衛隊が参加していたというのである。これこそ、「ガイドライン」設定後の具体化されつつある日米共同軍事行動態勢を示すものではないか。

第五九回総評大会 「右に開かれた」総評労働運動

七月下旬に行なわれた第五九回総評大会は、「開かれた総評」をメインスローガンとしていた。だが、どこに開かれているのか、これがこそが問題なのである。

「開かれた総評」ということで、富塚などが考へていることは、第一に労働戦線の統一の問題であり、第二に経営参加の問題であり、第三に社会党一党支持の見直しである。

富塚らは、「このままでは総評は袋小路に押し込められてしまう」との危機感から、「右に開かれた総評」の方針を提出した。そして、左派からの批判に対しては、「『左』の看板を背負つていれば、どんなに少数派になつてもいいのか」と居直つてゐるのである。まず、その中で、一番中心的な問題ともいえる労働戦線の統一について見てみよう。同じ時期に、同盟はこの問題について、「労働組合主義」「国際自由労連への加盟」を条件として打ち出している。そのような状況下で富塚は、「戦線統一なくして八〇年代の展望はない」、「水割りウイスキーになつても統一に踏み込むべきだ」、「実施には三年をメドとし、総連合を通じて話し合い、同盟を得する」、等と述べたのであつた。

富塚らが「戦線統一」と大騒ぎをするのは、同盟・JC主導の統一の動きが進展する中で、それに乗りおくれてはいけないという孤立を恐れる小ブル根性でしかなく、それは「水割りウイスキー」と語るごとく、一層ブルジョア組合主義に屈伏することに他ならない。

鉄鋼労連は、八月八日、このような総評のダラ幹の心中を見こした上で、「①年内に民間先行の統一準備会をつくる②来年秋にも新ナショナルセンターを設立③新センター結成に参加し、総評から「円満な脱退」をする」(八月九日、毎日夕刊)という方針を決定した。これらの動きとともに、富塚らの策動は、一段と活発になるであろう。

第二の経営参加論は、個々の単産でのそのような路線を公然と承認したものである。それは、労資協調主義に他ならず、ブルジョア

(二)

「フォートレス・ゲール」に参加するために沖縄に出発するのに先立つて、永野陸幕長は、「北富士演習場で、米海兵隊を敵の上陸部隊と見立てた対抗演習を行いたい」と語った。「フォートレス・ゲール」への自衛隊の参加が、このことを前提としたものであることは言うまでもないであろう。

すでにこれまで、海上自衛隊は、五五年の

掃海訓練を皮切りに本格的な対潜共同訓練を行つており、航空自衛隊も昨年以来六度の共同訓練を実施してきている。そして、昨年の「ガイドライン」設定にともなつて、日米共同訓練は一層積極化されざるをえず、さきの山下防衛厅長官とブラウン国防長官の会談においては、より一層拡大していくことが確約されているのである。

このようない、日米共同軍事行動態勢の強化は、ともに「ソ連の脅威」を口実として遂行されている。山下防衛厅長官は、八月に訪米した際、ブレジンスキイ大統領補佐官との会談において、「日韓がアジアの安定の中核」であることを確認した。又、ブラウン国防長官との会談では、「ソ連の軍事的脅威」が増大していることを相互に確認し、記者会見において初めて「脅威」ということを明言したのである。

この動きは、これまでの日帝の有事体制構築の策動の一環に他ならない。先ごろ発表された「防衛白書」においても、「ソ連脅威論」が全体を通して貫かれており、「疑惑」をよき事態は変わるものではない。そもそも、これまでの一党支持は、社会党のセクト的利害に負うところが大であり、共産党の批判も、その土俵上のものでしかなかつた。そのことが、行きつつあるのである。

三つの目は社会党一党支持の見直しにしても事態は変わるものではない。そもそも、これまでの一党支持は、社会党のセクト的利害に負うところが大であり、共産党の批判も、その土俵上のものでしかなかつた。そのことが、社会党、総評双方の頽廃の中で改めて問題となってきたのである。ブルジョア的自由政治の道を歩もうとするものに他ならない。その一つの帰結が、九月五日に決められた、総評と公明党との選挙協力である。

この「ソ連脅威論」の特徴は、防衛大卒業式での大平演説が「わが国が名譽ある生存を確保するため」と語ったように、国民的合意をとりつけて軍事力を増強し、軍事大国化を進めているのである。山下長官は、E2C導入についてヘイワード海軍作戦本部長と会談している。

だが、そもそも「ソ連脅威」とは、何ら具体的、科学的分析の上に述べられているのでなく、ただただ日帝の軍事力の強化の口実として呼ばれているにすぎない。それは、民族主義をあたりたての、挙国一致体制確立攻撃と一対のものとしてあるのである。

この「ソ連脅威論」の特徴は、防衛大卒業式での大平演説が「わが国が名譽ある生存を確保するため」と語ったように、国民的合意をとりつけて軍事力を増強し、軍事大国化を進めているのである。山下長官は、E2C導入についてヘイワード海軍作戦本部長と会談している。

だが、左派といわれる部分にしても、これらの路線に対して徹底した批判を行うことができなかつた。それは、彼らにしても、総評ダラ幹との間に、万里の長城を形成しているわけではないことからして、当然のことである。左派の代表といわれてきた労働なども、語っているだろう。

だが、左派といわれる部分にしても、これらの路線に対して徹底した批判を行うことができなかつた。それは、彼らにしても、総評ダラ幹との間に、万里の長城を形成しているわけではないことからして、当然のことである。左派の代表といわれてきた労働なども、語っているだろう。

革マル派のヘゲモニーの下で、国鉄資本への屈伏の道を歩んでいる。

このような状況の中では、勤労千葉、造船労働者、全金田中機械、ペトリ、等々の戦闘的労働者は苦闘を続いている。労働者階級は、統一と団結をかちとらなければならない。だがそれは、ブルジョア組合主義者どもが言うような代物では決してありえない。労働者は、労働組合だけでなく、階級政党に組織されなければならぬのである。

全世界的に戦争と革命の要素が増大している中で、日本だけそれから免れることはできない。それどころか、日帝の軍事大國化もまた、世界のよき趨勢の一規定要因なのである。自衛隊は、まぎれもなく資本家階級の常備軍であり、その強化は、他民族の抑圧とともに、自国の労働者階級の支配の強化と同義である。そして、その武装の解除は、ただ実力によつてのみ実現することができる。すなわち、労働者階級の武装、これである。

YH貿易労働者との闘い

新民党本部に機動隊乱入

八月十一日未明、YH貿易の女性労働者八十名がたてこもっていた新民党本部に、機動隊が催涙弾を打ち込みながら乱入した。その際、女性労働者、新民党議員五十数名が負傷し、さらに女性労働者金景淑（キム・キヨンス）さんが死亡したのである。

この暴挙は、金泳三（キム・ヨンサム）新民党総裁が述べるごとく、朴の「末期的あがき」を示すものに他ならない。

YH貿易は、張道虎（チャン・ヨンホ）によって一九六六年に設立され、朴政権の輸出振興政策によって急成長した企業であった。であるが故に、「韓」国経済のかげりとともに負債が累積し、本年に入つてその額は、四十億五千万ウォンに達し、三千人をこえた労働者は六百人にまで削減され、ついに本年四月に「廃業」を宣言するに到つたのである。

この「倒産」劇は、人員削減に対して闘う労働者の団結の破壊を狙うものであった。これに抗議する五百人の女性労働者は、四月十三日から座り込み、籠城の闘いに入り、機動隊の筆舌につくしがたい蛮行に耐え、ついに会社側の撤回をかちとつたのである。

だが会社側は、この八月六日、再び、全員解雇、工場閉鎖をもつて、戦闘的労働者に応えんとしたのであった。これに對して百八十名の女性労働者は、工場内の寄宿舎において座り込み闘争を開始し、そこを追い出された八月九日からは、新民党の本部に拠点を移して座り込み、籠城闘争を続けたのである。

そして八月十一日午前二時頃、労働者の闘いの発展に恐怖した朴政権は、自らの番犬を放ち、彼らは、暴虐のかぎりをつくしたので



機動隊の護送車で連行される
YH貿易の女性労働者



弔辞を読む金総裁

マルクス・レーニン主義通信

あつた。そして、その中で金景淑さんは斃れたのである。

八月二八日の追悼式で、金泳三氏は次のように述べた、「金さんの死因はいまのところはつきりしない。ただ一つ明確なことは、暴力に最後まで抵抗して死んだことである。彼女の遺志を継いで戦いを続ける」、と。この決意は、必ずや全南朝鮮人民の、否、全世界の労働者人民のものとなるであろう。

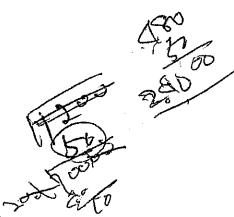
危機深まる「韓」

今回の事件は、ひとりYH貿易労働者だけのものではない。YH貿易の倒産は、「韓」国経済の一表現である。

「韓」国経済は、前にも述べたように、借金財政に依拠した輸出拡大によって「高度成長」をとげてきた。だがその脆弱さは、世界的な不況の中で馬脚をあらわしたのである。インフレが進行し、朴の対応策は何の役にもたたず、更に今年七月の石油価格の大躍昇に追い打ちをかけられ、「不況とインフレ」はいよいよ深刻なものとなつたのであつた。

すでに倒産企業は、中小にとどまらず、昨年の制世グループにひきつづき、四月には栗山グループ、五月には源進レーヨン、六月には日新、宇進建設、石楽と大企業の倒産があつた。ついで、韓國生糸グループ、大韓電線などの財閥企業も倒産寸前という状態なのである。又、失業者は、昨年末すでに十万人以上

をふるいたたせ、すでに八月二〇日には五千人のデモがソウル市内を席巻し、同二八日の追悼式には、朴のどうかつと弾圧をはねのけて千数百人の人民が結集した。又、金さんの追悼式には、朴のどうかつと弾圧をはねのけて千数百人の人民が結集した。又、権力の妨害によつて参加できなかつた金大中の闘いらとともに、英雄的労働者と民主的士の團結は、一層強固なものとならざるをえない。



そして今日には、大邱市にある啓明大、慶北大、嶺南大の学生が決起している。朴政権は、今回の事件でも又、デッチ上げを画策するであろう。だが、いかに朴がなりふりかまわぬ弾圧を強めようとも、闘う人民の炎は決して消することはできない。そして、この朴政権を支えているのが、アメリカ帝国主義であり、他ならぬ日本帝国主義であるといふことを頭に刻みこまなければならない。

六〇年四・一九革命における金生烈（キム・ジュヨル）君の虐殺、七〇年代の闘いにおける全泰堯（チョン・テイル）氏の自殺と同じように、金景淑さんの死は、新たな闘いの鼎揚の発火点となるであろう。それは又、八〇年代の闘いの主役が、だれであるのかを鮮明にしているのである。

マルクス・レーニン主義通信

第一次ブント総括

三

次

はじめに
第一章 第一期（六一—六六年）関西ブントの思想形成
第二章 ルカーチ、グラムシ批判

第三章 第二期（六六—六九年）関西ブントの実践過程

(一) 分派鬭争——四五五藝へ

「承前」

われわれは、『通信』四七号に
おいて、叛旗派の政治主張を、ご
く簡単にながめてきた。ここでは、
彼らの主張の政治的性格を、もう
少し詳しく検討してみよう。

以上のことは、マルクスの經
共同体創設をめざすとともに、
政治的国家からの疎外」の面で
「生活の革命化（行為）」によ
る。疎外の止揚をめざすとされる
である。

派の政治理論は、自らの経済主義を正当化するためのものでしかないと。そもそも、「階級形成」云々ということと自体、経済主義の特徴を示しているのであり、そのかぎりでは、第二次ブントが又その本家本元であるし、各分派は、当初は「階級形成論」の相違によつて区別されていたと言うことも可能であろう。

さて叛旗派の主張であるが、それは、階級形成論を中心としており、しかも、市民社会論、共同体論に依拠したそれである。ここでは、平田清明や吉本隆明の批判は不必要なので、つづこんだ検討ははぶくが、要するに、資本主義以前における共同体においては、個的所有が存在しており、それが資本主義になつて市民社会に転化したと主張し、市民社会と共同体を対立概念として把握するのである。更に、「経済的構成に基づく社会的国家」(?)と、「市民社会の外に独立する政治的国家」幻想な共同性」への「二重化」が生じ、「市民社会からの疎外」という面では、生活獲得をめざし、ある叛旗派にとっては、党も又、

このようないかで、大衆運動に意味付をおこないたいからなのである。すなわち、成田、砂川、学園などの「拠点」での闘争は、「生活のための闘い」であり、それ自体として「社会的階級への形成」現実的共同体への接近」であると述べるのである。同盟内全共闘派は、と言われた叛旗派の面目躍如といふところであるが、かくして経済主義のバターンが完成するのである。「拠点」での闘いから、自生的に社会主義に発展すると主張するのであるから。

階級形成の道具でしかありえない。しかも彼らは、それを、吉本自立論とレーニン組織論は同じだ、「あらが、『理論戦線』を独占していく成長していくのをゆっくりまつか、ことを通して「このことが各地方めせって教えこむかの差である」だが、大衆とインテリが相互に展開するのである。

媒介しあつて、国家に近づく、あるいは、大衆ブントに対し、インテリブントが意味を付与するな」という組織思想が、レーニン党と同じものであろうか？「百万ベルも否である。叛旗派の党は、大衆運動をけいもうする役割を持つすぎず、彼らはそれをかっこつけて語っているだけである。

ここまで見てきたように、彼ら特有的の観念的言いまわしははぶい、そのガイストだけ抽出してきに他ならず、しかもブントが有していた経済主義の最も右翼的内容を体現していたのである。

それ故に、四・二八以降の総括においても、最も核心的内容であった党の独自的活動の importance を把握しえず、その任務を八派共闘へと解消し去ったのであった。同じ主義の観点から同じ内容を展開しようなことは情況派にも言えるのであって、彼らは、俗流労働運動は相互に補完しあつて、同盟内の右派勢力を形成していたのである。

彼らは、九回大会の内容とは、ほとんど無縁であった。

次に、日向派を見てみよう。前

それはまず、『理論戦線』№7 の、党組織の観念的解釈、意味付与によって開始されたのであるが、本格的に「革命論」として展開されたのは、『理論戦線』№8 からである。

№8 の日向論文は、「はじめに」で次のように述べている。「ここでは主要に戦略論構築上の方法論的諸問題に關して触れている。」
「」のような論文が提起されるためには更により本質論的には、①物史観、②…唯物弁証法等に対するより根底的な視点の提起がなされねばならないのだが、それに關しては我々が各々批判的視点を確立しつつ評価している諸氏、例えば藤本進治や広松涉、清水正徳、平田清明、吉本隆明等の諸見解を参照されたい。経済学的にはそれは宇野弘藏ということである」。

これだけで、おおよそどのような代物か想像がつこうというものではないか。

ともかく内容に入ると、最大の柱である「革命論方法論」の核心は、「産業資本主義段階におけるマルクス革命論と对照、レーニン

第五章 第三期（六九年以降）関西ブントの思想的、実践的分解

(一) 党内闘争
(二) 分派闘争—四分五裂へ(本号)
(三) 一二・一八路線から全国委員会へ
おわりに (前号まで)

マルクス・レーニン主義通信

・トロツキーの提起した内容を革命論における特殊段階論的本質論としてとらえる、そしてそれ等との差別と関連の中で現代世界の現実形態論的把握としての、過渡期世界論を基軸にふまえて、場所的に革命論を構築していく」ということである。

この内容自体の検討を行うとすれば、宇野三段階論やら武谷三段階論やらの検討を必要とし、長くならざるをえないので、このよう

な問題の立て方自体の問題をあげるにとどめておく。

この日向論文は、「理論戦線」No.9の、「より正確な対象認識の道を求める」方針のズレは許されない、「革命論を何人も認めざるを得ない方法論体系の中で位置づける」、「革命論をイデオロギーの領域から科学の領域へ」という衝動から書かれている。このことは、認識に優位性をもたせ、いわば「原理」を求めることになるのであって、「共産主義」は革命的実践」ということから大きく逸脱するものである。それは、「戦略論」「運動・組織論」と区別された「革命観」「共産主義」を規定していることにも明らかである。

といふものの、これ以降、各フランクションは、「方法論」ととりくむことになったのであるが、「共産主義」一四号の方法論批判は、今日でもかなりの有効性を有していると思われる所以参考されたり。

だが結局のところ日向派は、宇野理論に依拠し、そこからレーニン「帝国主義論」を批判し、後に「共産主義」の原理を抽出することになったのである。No.8日向論文のもう一つの柱は、うのである。そもそも日向派にと

「プロレタリアの存在の論理」であり、それは、「プロレタリアの存在論的規定や、即ち的プロレタリアが革命的プロレタリアへと自己形成し、革命的自覚をとげるさうに、「階級形成」の道具でしかいの内的論理の解説」として説明されているが、つまるところ、「とめを見ることができる」とされるのである。

藤本進治『革命の哲学』にそのま

されていて、つまるところ、「以上見てきたように、日向派もこのようなプロレタリアの存在論化は、「階級形成」を唱える際の小ブル・インテリのみのチームであるが、それを哲学的に体系化せんとすれば、黒窓の「自覺の論理」のごとき代物になるのがオチである。

さて、これらのことの大体系化したものが『理論戦線』No.9の日向論文に他ならない。ここでは諸々のことを一切はぶき、いかにして経済主義が完成されれるかにしづつて検討する。

日向論文においては、まず宇野経済学に依拠して、共産主義=原

理が提出され、そこから一切が意味付与される。すなわち、革命のシナリオが完成されるのである(P.七九の図のこつけいさを見よ!)。

そして、内戦に到るまでの「恒常的武装闘争」は、「帝軍解体・正規軍建設・ソビエト型組織建設」の運動とされ、実際には叛軍闘争へと一面化されるのである。叛軍

の萌芽としての叛軍行動委、地区の闘争から内戦・蜂起が生まれるというのは、まさしく経済主義である。

このことは、組織上においても反映され、RGなどは口にされて

鉄鎖を碎け

●特集／へ統合にむけた論戦／に対する我々の態度
その他 婦人労働者の状態・ロー・ザ批判など

第3号近刊

予価500円

■諸潮流の再編が進行しているなかで、共産同第六回大会の道を選ぶのか、綱領、戦術、組織上の統合をかちとるのか、これこそが最も重要な点である。

創刊号 発売中

わが同盟の軌跡

500円

第2号 発売中

共産同系諸組織の批判

500円

全国書店で発売中

「プロレタリアの存在の論理」での関与にとどまる」(『理論戦線』No.7)だけであり、「大衆の闘争に論理を与える」(同)というように、「階級形成」の道具でしか日本革命へ、というかのスローガンと。たく同じ論理である。反帝闘争を日本革命へ、というかのスローガンと。

又、壮大な理論体系を構築しようと、も経済主義に他ならなかった。

この項の最後に仏派を検討しておこう。

仏派の党派性は、「七回大会、九回大会の限界を克服し、八回大

会の革命的意義を繼承せよ」といふ論文を結集軸としたことである。

彼らは、「帝国主義論が党を持つこと」に示されている。八回大会の評価はすでに行つたのでくりかえさないが、要するに仏過渡期世

界論を結集軸としたことである。

彼らは、「帝国主義論が党を持つこと」と述べているように、解釈の党、言いかえれば戦略の党といふことを持続してきたのであった。

ここでは、簡単に、『鉄の戦線』一号を見るに至る。そこでの

仏論文は、現代世界を、世界革命の未完として主体的階級闘争世界と規定する。だがそれは、他の過

渡期世界論と同様に、主觀的、恣意的に世界を解釈したものでしか

ない。例えは、「帝国主義の崩壊の原理と形態論」を言い、統一市場の分断からファシズム・前段階

の闘争から内戦・蜂起が生まれるというのは、まさしく経済主義である。

更に、第三章においては、何故に自衛隊に対する闘争が重要かと

帝には国民を戦場へ動員する決定的イデオロギーがない」、「日本

も、それは「将校団」ということ

で、実際には、「ソビエト型組織」も結集軸のない軍隊である。日本

国民から合法的合意もとりつけていない」云々から、結局、自衛隊はもろいし、これを攻撃すれば國